2022年10月2日  川越教会

丸山　勉

出会い続ける神

［エズラ記1章1～11節］

ペルシアの王キュロスの第一年のことである。主はかつてエレミヤの口によって約束されたことを成就するため、ペルシアの王キュロスの心を動かされた。キュロスは文書にも記して、国中に次のような布告を行き渡らせた。「ペルシアの王キュロスはこう言う。天にいます神、主は、地上のすべての国をわたしに賜った。この主がユダのエルサレムに御自分の神殿を建てることをわたしに命じられた。あなたたちの中で主の民に属する者はだれでも、エルサレムにいますイスラエルの神、主の神殿を建てるために、ユダのエルサレムに上って行くがよい。神が共にいてくださるように。すべての残りの者には、どこに寄留している者にも、その所の人々は銀、金、家財、家畜、エルサレムの神殿への随意の献げ物を持たせるようにせよ。」そこで、ユダとベニヤミンの家長、祭司、レビ人、つまり神に心を動かされた者は皆、エルサレムの主の神殿を建てるために上って行こうとした。周囲の人々は皆、あらゆる随意の献げ物のほかに、銀と金の器、家財、家畜、高価な贈り物をもって彼らを支援した。キュロス王は、ネブカドネツァルがエルサレムの主の神殿から出させて、自分の神々の宮に納めた祭具類を取り出させた。ペルシアの王キュロスは財務官ミトレダトによってそれを取り出させ、ユダの首長シェシュバツァルの前で数えさせたところ、その数は次のとおりであった。金の容器三十、銀の容器一千、小刀二十九、金杯三十、二級品の銀杯四百十、その他の祭具一千、以上金銀の祭具の合計五千四百。シェシュバツァルは、捕囚の民がバビロンからエルサレムに上って来たとき、これらの品々をすべて携えて上った。

 [１] 「礼拝」と神様からの呼びかけ

　この朝もご一緒に礼拝を捧げられますことを感謝致します。もう10月の第一週を迎えましたが、今月と来月は特別な週以外の時は、旧約聖書の「エズラ記」と「ネヘミヤ記」を読むことになります。そのテーマは、バビロン捕囚後の、エルサレムにおける神殿の再建、ということです。はるか昔の、異国の歴史物語ではありますが、私たち信仰者にとって、「礼拝」ということ、また「教会とは何か」ということをここから聞くことが出来ると思います。

　ユダヤ人にとって、バビロンに多くの者たちが連れ去られたこと、また礼拝の中心であったエルサレム神殿が崩壊してしまったことは、単に国家的危機と言う以上に、依って立つべきアイデンティティーを喪失するような厳しい出来事でありました。イスラエルという国家自体がもともと信仰共同体でしたから、「神殿崩壊」ということは神様を見失うようなことであり、「神殿再建」というのは、信仰の復興に深くつながっていたことだと言えると思います。

　私たちも礼拝します。主イエス・キリストの十字架と復活の恵みを頂いて、父なる神様を讃えます。それはイスラエル民族の枠を超えた、全ての人を招いて下さる神様の憐みに根ざすものです。けれども、この礼拝の源流とも言うべきものは、このユダヤ人たちの神殿での礼拝、もっと遡れば、今木曜祈祷会では民数記を学んでいますが、そこでも書かれている、神殿以前の荒野における「幕屋」での礼拝と祭儀というものが源流にあると思います。

　私は思ったのですが、他の宗教とキリスト教（その前身は旧約ではユダヤ教）の礼拝は大きな違いがあると思いました。何かというと、礼拝とは人間の自発的な宗教的な思いというよりも、「神様からの呼びかけ」である、ということです。これは大きなことではないでしょうか。何となく神様を礼拝している、というのではないのです。まず、神様の言葉、「わたしの名を呼べ」「献げものを携えよ」「あなた自身を献げよ」という呼びかけがあり、その応答が「礼拝」なのですね。繰り返しになりますが、ユダヤ人たちにとっては、それが自分たちの存在意義と一致していた。だから、神殿礼拝というのは真剣なもの、自分自身の心を注ぎだして神様に真向かうような行為だったのです。バビロン捕囚の中でも、神殿には行けませんが、彼らは自分たちの集まりの中で、エルサレムの方角を向きながら胸を打ち、神様を礼拝していたのです。…翻って自分自身のことを思います。ふと、礼拝が面倒くさいなぁ、と思ってやしないか、何となくの、また、自分の都合を考えての礼拝になっていないか（牧師がそんなことを言ってはいけないのだと思いますが）、それは問われていることだと思います。

［2］新しい歴史

　バビロニア王国の絶頂期はネブカドネツァル２世が統治した40年程であったと言われます。その後弱体化し、代わって台頭してきたのがアケメネス朝ペルシアでした。やがてそのペルシア王キュロス２世がバビロニアを征服しました。そしてこのキュロス王が、捕囚の身になっていたユダヤ人たちを解放し、故国で神殿を再建することを許可したというのです。歴史が大きく動いた瞬間です。それがこのエズラ記1章の初めの部分です。実はこの部分は、聖書ではすぐ前に置かれている歴代誌下の36章の最後の部分と同じです。ここからキュロス王の時代のことが書かれています。歴代誌は、列王記と並んで、ユダヤのそれこそ歴代の王の歴史が書かれてあり、神殿が作られた様子や、それが崩された様子なども書かれています。ちょっと、今日の箇所の前触れになる、歴代誌下の36章の19節以下を読んでみます。―「神殿には火が放たれ、エルサレムの城壁は崩され、宮殿はすべて灰燼に帰し、貴重な品々はことごとく破壊された。剣を免れて生き残った者は捕らえられ、バビロンに連れ去られた。彼らはペルシアの王国に覇権が移るまで、バビロンの王とその王子たちの僕となった。こうして主がエレミヤの口を通して告げられた言葉が実現し、この地はついに安息を取り戻した。その荒廃の全期間を通じて地は安息を得、七十年の年月が満ちた。」

そしてこのあとの言葉は、エズラ記の最初の部分と重なっています。テレビドラマで言えば次週の予告ですね。でも、これは予想を超えたような、神様の出来事だったのです。列王記36章22節以下、つまりエズラ記の冒頭部分です。―「ペルシアの王キュロスの第一年のことである。主はかつてエレミヤの口を通して約束されたことを成就するため、ペルシアの王キュロスの心を動かされた。キュロスは文書にも記して、国中に次のような布告を行き渡らせた。「ペルシアの王キュロスはこう言う。天にいます神、主は、地上のすべての国をわたしに賜った。この主がユダのエルサレムに御自分の神殿を建てることをわたしに命じられた。」―そして、様々な祭具類も皆持ち帰りなさいと、かなり好意的にこのキュロス王はユダヤ人たちに接していますね。しかしこれはキュロスが信仰者になったのではなく、彼は政治家として太陽政策を採って（北風政策ではなく）、ユダヤ人たちを自分の味方にしようとしたということだろうと言われます。ユダヤ人たちが一番喜ぶのはエルサレムへの帰還であり、神殿の再建であると思い、それを進めたのです。しかし聖書はそういうようなことも含め、「主」、つまり神様が働かれたと書かれていると思います。ここでの主語が「主は」となっています。「主は…約束されたことを成就するため」。これがとても大事なのだと思います。

［３］神様は、私たちに出会い続けるお方

　ユダヤ人たちはどんなに喜んだことでしょうか！自分たちの故郷に帰れる、自分たちの拠り所であったあの神殿を再建出来るのだと。実際その喜びは3章以下に出てきます。しかし決して一枚岩ではなかった。温度差があるのです。ある意味当然ですね。50年以上の年月は、バビロンでの暮らしに慣れて来るということも意味します。そこで生まれた子供がむしろ今壮年層になっている。今の生活が当たり前になっている。エルサレムへの帰還とか神殿再建とかへの思いが薄れている、ということはあり得ることです。週報の巻頭言でも紹介しましたけれども、2020年から始まったコロナ禍で、ともすると「自粛」の名のもとに集まらない礼拝が当たり前になり、それに慣れてしまうことがあると、ある神学大学の先生が警鐘を鳴らしていました。良くも悪くも、人は、「慣れる動物」なのです（ドストエフスキー）。

そういう意味からすると、エルサレム帰還というのは、必ずしも皆の大喜びの出来事であったのかどうか怪しいのです、冷静に考えると。ですから、私は今回このことを考えていてこう思いました。このエルサレム帰還、神殿再建の出来事は、ユダヤの民の悲願である以上に、神様の悲願なんだな、と！ですからここでも主語は「主は」なのです。神様の思いが先行しているのです。神様の思いとは何なのでしょう？それが、エレミヤ書の29章に記されていると思います。12節以下にこうあります。―「そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。わたしを尋ね求めるならば見いだし、心を尽くしてわたしを求めるなら、わたしに出会うであろう、と主は言われる。わたしは捕囚の民を帰らせる。わたしはあなたたちをあらゆる国々の間に、またあらゆる地域に追いやったが、そこから呼び集め、かつてそこから捕囚として追い出した元の場所へ連れ戻す、と主は言われる。」―お分かり頂けると思います。神様は私たちに会いたいのです！どういう私たちか。神様に背き、異国の地で慣れてしまい、神様礼拝を忘れ、目先の生活で四苦八苦している私たちを神様は呼び、つまり私たちを忘れず、私がこの出来事を起こすから帰って来い、私はあなたともう一度出会うことを切望しているよ！ということでしょう。何という愛でしょうか。憐みでしょうか。

考えてみて下さい。私たち、嫌だなあ、私のこと嫌いなんだなあ、と思う人とは出会いたくないのが普通です。どうしてかと言えば、出会えば自分が傷つくから。…けれども、神様は、イエス様は、私たちとの出会いを本当に喜んで下さるんです！ご自分が傷つくなんていうことは考えない。いや、それでも良い。私たちが本当に神様の愛の中で生きることが出来るように、向こうから近づいてきて下さったのです！それが、主の晩餐式でもあり、あの十字架の出来事でもある訳です。

私たち、「主の思い」を聞いて生きといくと言うことが大事なのではないでしょうか。信仰とは、一度バプテスマを受けておしまいではないですよね。生涯、神様と出会い続けて行きたいと思います。それは、「あなたと出会いたい」という神様の思いが、私たちの状態如何に関わらず、いつも変わらずにあるからです。

　お祈り致します。